

報道記事における客観性

— 体系機能文法の観点から

進藤 三雄

1 はじめに

新聞における報道記事には大きく分けて、社会的秩序を混乱させるような事件を報道するhard newsと、比較的安定した出来事や人々の日々の生活の様子を取り扱ったhuman interest storiesとがある。ある大きな事件が発生すると、一般に警察からの公式報道を基づいて記事が組まれ、hard newsとして新聞のトップニュースに取り上げられる。このような報道は、できるだけ早く、正確に、そして客観的に読者に情報を伝えることが特に求められる。そしてしばらく時間が経過すると、その事件によって引き起こされた物理的、精神的損害を修復しようとする人々の取り組みがhuman interest storiesとして継続的に取り上げられることが多い。このような報道は記者の取材を中心に作成されることが普通である。一方、社説などに代表されるcommentaryは書き手である論説委員や新聞社の思想が色濃く反映され、当該事件に対する社会的価値判断や今後取るべき方向性が示される。

本稿では、あるひとつの事件における新聞報道を中心に、その事件発生時に

おける記事、事件発生から約1週間経過した時点での人々の対応を取り扱った記事、更にその事件に関する社説を言語資料として取り上げ、ジャンル構造、主題構造、対人的意味の観点からテキスト分析を行うことでそれぞれのジャンルにおける特性の違いを確認し、それらの特性がそれぞれの記事における客観性（あるいは主観性）にどのような影響を及ぼしているかを考察するものである。

これらの分析にあたっては、他の事件に関する新聞報道も言語資源として適宜使用する。また、テキスト分析における理論的枠組みは体系機能文法 (Systemic Functional Grammar) に置き、談話意味分析においてはAppraisal理論 (Martin & White 2005; Martin & Rose 2007) を援用する。

2 新聞記事の種類

新聞記事を大きく分類すると、hard news、human interest stories、commentaryの3つに分けられる (Feez, Iedema & White 2008)。Hard newsは、我々の生活や社会秩序を脅かし、かつ報道の緊急性を要する出来事を扱い、社会に対する警告を発するメディアとしての役割を果たす。そこでは何が起こったか、誰が何をしたか、何を言ったかなどに焦点が当てられる。さらにhard newsは、事故、天災、紛争、犯罪など、物質の世界における現象を取り扱う記事 (event stories) と、政府の声明、科学的発見などのコミュニケーション世界における発言過程を取り扱う記事 (issue stories) の2つに分類される (White 1997: 105-106)。

Human interest storiesはhard newsに対してsoft newsと呼ばれることもあり、比較的安定した自然現象や人々の生活の様子を描写し、社会的秩序を構築する話題性のある出来事を取り扱う。また事態の緊急性に関しても比較的緩やかな出来事を中心に取扱い、それらは数日たってからも記事として使えるものが多

い。そのため事件が少ないときにはニュースの隙間を埋める役割を果たすこともある。Feez, Iedema & White (2008) はhuman interest storiesの下位区分として、すでに過ぎ去った事件や出来事に対する人々の対応や信念を示すmedia exemplum、読者の興味を引くような出来事や自然現象を取り上げ、それに関わる人々の行動を描写するmedia observation、人を楽しませる要素を含む出来事を取り扱う短いゴシップタイプのmedia anecdotesの3つを挙げている。Hard newsとhuman interest storiesは報道する内容の点では違いはあるが、出来事を記録するという社会的目的では共通すると言える。

一方、commentaryは議論を通して読者に送り手側の主張や提案を納得させることを社会的目的とする (Martin & Rose 2007)。Iedema, Feez & White (1994) はcommentaryの下位区分として、media exposition、media challenge、media discussionの3つを挙げている。media expositionはある出来事に関して書き手の主張を展開するものであり、社説はmedia expositionに含まれる。Media challengeは相対する主張に反駁することを基本にしながら議論を展開するものである。このふたつとは対照的にmedia discussionは必ずしも読者に主張を納得させるものではなく、多様な意見を読者に紹介し議論を深めることを目的とする。

3 報道記事のジャンル構造

報道記事の言語的特徴を分析する上で、まずそれぞれの記事のジャンル構造を比較する。Martin and White (2005: 33) は談話のジャンルを次のように定義づけている。

- (i) staged because it usually takes us more than one phase of meaning to work through a genre,
- (ii) goal-oriented because unfolding phases are designed to accomplish

something and we feel a sense of frustration or incompleteness if we're stopped,

(iii) social because we undertake genres interactively with others.

つまりジャンルとは「ある目的を達成するために、段階を追って成し遂げられる社会的な過程」であると言える。

3-1 Hard newsの構造

Hard newsのジャンル構造は、まずheadlineがあり、その後にlead¹と呼ばれる記事の概略を述べた部分が続く。このheadlineとleadは併せてnucleus（核心部）とも呼ばれ、その後のbodyにおいて詳しい情報が記述される。まず核心部の詳細を見る前に本文の機能を見てみたい。White（1997: 115）はhard newsの本文における意味機能を次のように分類している。

- ・ 詳細(Elaboration): Nucleusの詳細、例示、再提示など
- ・ 因果関係(Cause-and-effect): 出来事の原因・理由・目的とその結果
- ・ 証明(Justification): Issue reportsにおける主張の裏付けとなる具体的証拠
- ・ 背景(Contextualization): 出来事の時間的、地理的、社会的背景
- ・ 評価(Appraisal): 感情表現や事件に対する評価

Text 1 は2005年12月に起きた殺人事件を取り扱った報道記事であり、当時同様の事件が多発していたという社会的背景がある。Body部の左には上の分類に従ってそれぞれの意味機能が表示されている。

¹ Bell (1991: 176) は英語の場合leadを最初の1文としている。一方Iedema (1997: 95) は、leadをheadlineの後の1つか2つの段落で、話の要点が述べられている部分であるとしている。ここでは殿岡 (1979: 52) に従い記事の最初の要約部分として議論を進める。

Text 1

Headline	栃木の小1 殺され 発見 茨城の山林跡に刺し傷 前日の下校中不明に	
Lead	1	栃木県今市市で小学一年生の吉田有希さん(7)が行方分からなくなっていた事件で、1日午後3時ごろ、遺体が市東に約65キロ離れた茨城県常陸大宮市の山林内で見つかった。
	2	遺体には、胸など数か所に刺し傷があり、これが致命傷になったと見られる。
	3	栃木、茨城両県警は朝日、殺人・死体遺棄容疑で、栃木県警今市署に巡回捜査本部を組織した。
Cause/effect	4	母親の幸子さん(38)が、同夜、茨城県警大宮署で遺体を確認した。
	5	捜査本部は三日午後、刑法部として殺人・死傷などを調べる。
Elaboration	6	調べでは、遺体は常陸大宮市三美にある公園の火葬場「おのみや広域型苑」南東の山林内で、道路からの10メートル下の斜面に左側を下にして横たわっていた。
	7	野鳥保護の下見をしていた男性3人が見つけ、大宮署に届け出た。
Contextualization	8	女児が行方不明になった栃木県北部の今市市から、遺体発見現場の茨城県北部の常陸大宮市までは直線距離で約95キロ。
	9	国道115号で南下し宇都宮市に入った後、国道28号で東に向かい、界境の山間部を抜けるルートが一歩ひた。
Elaboration	10	調べでは、発見現場周辺の草木に茂みがあり、血痕が散っていたりする様子ではなかった。
	11	女児は衣服を脱いでおらず、普段使用している金鎖の鞆鎖やランドセルなどの所持品も見当たらなかったという。
Cause/effect	12	捜査本部は何者かが女児を殺害した後、車で逃げ、山林内に遺棄したと見ている。
Contextualization	13	女児は1日午後2時ごろ、通っていた今市市立大沢小学校を同学年の女児3人と歩いて下校。
	14	2時00分ごろ、市道Y字路で友達たちと別れてから行方がわからなくなった。
	15	仕事から帰宅した母親が女児が1日1日に気づき、午後3時50分ごろ、栃木県警今市署の大沢駅前駐在所に届けた。
	16	小学校から女児の自宅までは約2キロ。
	17	Y字路から、自宅までは約2キロで、途中は田畑や雑木林、川などに囲まれている。
	18	森がやっとするほど奥の狭さで、普段、人通りはほとんどない。
	19	大沢小によると、女児は普段、2年生の姉と上級生と下校するが、本曜日だけは1年生は4時間授業で、上級生より先に下校していた。
Cause/effect	20	普段の不曜日には、祖母がY字路まで迎えに来ていたが、1日は都合がつかなかったという。
	21	同校は今後、複数の学年が一緒に下校できるよう終業時刻に配慮する方針だ。
Contextualization	22	通学路周辺では、先月末以降、複数の不審者情報があった。
(Wrap-up)	23	女児が行方不明になる前の先月30日午後2時ごろには、女児の通学路でも、ひげをはやし、顔髪がまざりさの顔面をかけた中年男が女の子に声をかけたという目撃情報か1日夜に大沢小に寄せられた。

(朝日新聞、2005年12月3日 朝刊)

Body部の意味機能の配列からわかることは、それぞれの意味機能が1度にままとめて記述されているわけではなく、他の意味機能と絡み合いながら交互に複数回出現し、核心部の詳細を繰り返し説明する形態になっているという点である。またbodyの最後にままとめとしての終結部が特に存在しないという特徴も確認できる。文21で一度記事が終わったかのような印象を受けるが、文22, 23において犯人特定につながる情報が提示されている。これは一般にwrap-upと呼ばれ、補足的な情報を提示するもので、全体を一言でまとめるような機能は有していない。「評価」に関しては事件に対する第3者の反応を引用形式で表現されるのが一般的であるが、Text 1の中には特に見られない。一方、次のText

2は米国における銃乱射事件を取り扱った記事であるが、ここでは事件に対する米国大統領による「評価」が述べられている。また「詳細」としてのwrap-upも観察できる。

Text 2

Headline	米乱射 死者13人 移民施設、容疑者は自殺
Lead	ペンガムトン(米ニューヨーク州)＝田中光 山川一基]3日午前10時半(日本時間同午後11時半)ごろ、当地ペンガムトンにある移民援助のための施設に、短銃で武装した男が押し入り乱射した。 地元警察によると、施設の米国人職員や移民ら13人が射殺され、4人が重体。男は乱射後、銃で自殺した。
Elaboration	容疑者の男は同州に住むベトナム系の42歳。事件当時、施設内には約50人いて、移民らが米国の市民権取得に向けた英会話講座を受けていた。 男は施設の後ろの駐車場に車を乗り付け、裏の出入り口を車でぶさく格好で駐車。そのまま裏玄関に歩いて侵入し、いきなり受付職員を銃撃し、別の部屋でも乱射を始めた。 現場を逃れた37人が施設内のボイラー室や物置などに身を隠し、施設を包囲した警察隊が約4時間後に突入。 弾丸入のガンを首からかけた男の遺体を確認した。近くで遺体の丁が発見された。
Cause/effect	犯行の動機などは不明だが、男はこの施設に以前から出入りして顔見知りだったという。数週間前、大手コンピュータのIBM社の工場で職を失ったとの情報もある。
Contextualization	現場の施設は移民や難民の米国定住を支援する非政府組織(NGO)「米市民協会」の拠点。
Appraisal	欧州歴訪中のオバマ米大統領は「衝撃と悲しみに沈んでいる。犠牲者と遺族に追悼の意をささげる」との声明を出した。
Elaboration (Wrap-up)	在ニューヨーク日本総領事館によると、3日夜現在、死傷者の中に日本人がいたとの情報はない。

(朝日新聞、2009年5月2日 朝刊)

次にbody部の構造について時間的観点から見てみたい。図1はText 1の出来事に焦点を当てその発生を時間軸に沿って整理したものである。報道記事は出来事を記録する点では物語のジャンルに属すると言える。しかしながら、物語の出来事が一般にその発生順序に従って描写されるのに対して、Text 1における出来事描写は、文13, 14, 15を除き、必ずしも時系列に描写されているわけではなく、テキストが進むに連れ「遺体発見」時を中心に前後しながら提示されている。この一つの理由としては、報道記事は普通の物語とは違い、その「報道価値の重要なものから順に提示される必要がある」ためだと考えられる (Bell 1991: 169)。このようにhard newsの意味機能や出来事描写の表出順序は定

まっているわけではなく、比較的散発的に現れる特徴がある。



図1 Hard newsにおける出来事とテキストの関係図

次にbodyとnucleusの関係について見てみたい。まずText 1のbodyにおける語彙連鎖の関係がどのようにleadとheadlineに集約されていくかを観察する。図2は、bodyにおいて複数回出現する語彙要素とそれが現れるセンテンス番号を記述したものであるが、ここでは被害者を示す語が核となり、その語を取り巻くように他の構成要素が互いに関連しながら存在している。そして各語彙要素をつなぎ合わせると、事件全体のスキーマ化された意味が構成される。

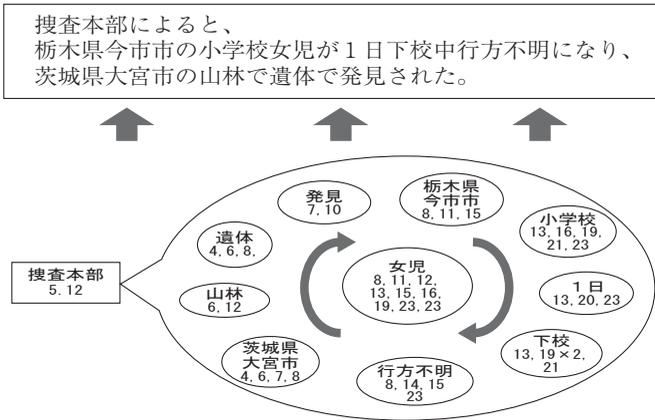


図2 Text 1 のBody部における主要語彙要素の観念図

また図3はText 1 のnucleus部を示したものであが、まずleadには先ほどのbody部に見られた語彙要素がほぼすべて含まれ、その内容がスキーマ化された意味に近いものになっている。このことから、leadはbody部の情報が効果的に凝縮されたものであることが確認できる。さらに図3から、headlineに現れる語彙のそのほとんどは、lead部で使用されている表現を短く言い換えたものであることがわかる。その方法として、名詞群の場合、短縮や省略（「栃木の小1」、「茨城の山林」「胸に刺し傷」）が使われ、動詞群の場合は名詞化（「発見」、「不明」）による文法的比喩が使用されている。これらの意味のパッケージ化により、headlineの表現は簡潔で印象的なものとなり、文字以外の情報（活字の大きさや報道写真等）と併せて読者を記事に引き込む効果をもたらしている。例外として「殺され」という名詞化されていない表現が使われている点が挙げられる。遺族への心情への配慮が不可欠であるとする報道側の立場（「事件と取材と報道」:131）からすれば、このような直接的表現は控えられるはずであるが、当時立て続けにおこった同様の事件にも照らし、そこには今回の事件の社会的重大性をあえて強調しようとする編集者側の意図が読み取れる。



図3 Text 1 のLead部とHeadlineの関係

このようにheadlineは記事全体の‘an abstract of the abstract’ (Bell 1991; 151) であり、leadを含むnucleus部は「物質的、対人的、規範的現状を脅かす出来事から重要な情報を抽出し、読者を社会秩序の混乱の中に即座に陥れる」(White 1997: 112) 働きを持っている。

以上、hard newsのジャンル構造は、lead^body^(Wrap-up)、から成り、図式化すると図4のようになる。Lead部とbody部は「言い換え(‘i.e.’)の関係」になっていると言えよう。また情報構造は逆三角形(点線部)の形を成し、重要な情報からそうでないものへと流れている。



図4 Hard newsの構造概念図

3-2 Media Exemplumの構造

Text 3はText 1における事件から約1週間たった現地の様子取材した記事である。また、Text 4は、2004年10月に日本列島に大きな被害をもたらした台風23号の通過から3日後の復興作業を取り扱った記事である。Text 3、4に共通する点は、ある出来事によって被害を受けた社会秩序を再度元に戻そうとする人々の試みがそれぞれ記録してあることである。

Hard newsのlead部がそれに続くbody部の重要な意味要素を網羅したものであったのに対して、これらの記事の冒頭では、過去に起きた当該事件についての簡単な紹介と、その事件に対する人々の取り組みの概要が述べられている。そこにはhard newsのような具体的な個人名や出来事については述べられてはおらず、「子どもたち」「大人たち」(Text 3)といった複数表現や、「助っ人」「復旧作業」「ボランティア」(Text 4)など、より抽象的で包括的な表現が使用されている。これらの部分はこれから述べようとする具体的記事への前置き、あるいは導入(orientation)としての機能を有していると言える。

Text 3

Headline	榎木女児殺害 集団登校 不安の再開 輪番、親も付き添い
Orientation	1 榎木市や市の小1女児殺害事件で、亡くなった吉田有希さんが通った市立大沢小 校では8日、事件から1週間となり、親が同行する集団登校が始まった。 2 7日までは保護者によるまでの送り迎えが続き、子どもたちは久しぶりに通学路を歩いた。 3 まだ犯人の逮捕には至らない。 4 大人たちは不安を感じつつ付き添った。（幸佳一平、角田薫）
Incident 1	5 午前7時半ごろ、2人の教師が女児が行方不明となった学校近くのY字路付近に立った。 6 「おはようございます」。 7 子どもたちは、地域ごとに5人前後の班に分かれて登校した。 8 輪番で当番となった親も緑色の輪番を付けた同行する。 9 田んぼの脇を通る通学路を替の深い草叢が朝と夜とに立つ形で一帯になって来た。
Interpretation 1	10 4年の男児の母親は「犯人が捕まるまでは安心して登校させられぬ、親が守るしか ないと思う」と言い息を吐きながら話した。
Incident 2	11 朝日7日夜、大沢小学校の路の一角、カーテンを閉めた朝日教室だけ夜9時半を過ぎてもこ うと父が力加わっていた。 12 臨時PTA役員会は3時間に及び、参加した13人は緊迫した雰囲気で見守りを交わした。 13 最優先課題は通学路の安全確保だ。 14 大人たちが「ルール」を行うことを決め、保護者以外の住民にも、8日から参加を呼びかけた めた。
Interpretation 2	15 榎川PTA会長(41)は「小学生の保護者は働く世代が多い。経験的に取り締むには地域の の方々の協力が必要と話す。
Incident 3	16 住民は早速、協力の反応を見せている。 17 参加する地域住民を募る動きもある。
Interpretation 3	18 学校から500mほど離れた榎川、榎川自治会の榎川会長(56)は「地域の子は地域で守る。団 體などで呼びかけたい」と意気込む。
Incident 4	19 今市教委は事件を契機に市内の小・中学生に携帯電話の所持を認めた。 20 保護者からの連絡や不審者が出た場合の警察への通報などに使う。
Interpretation 4	21 榎川会長は「出会い系サイトの問題など、懸念材料はある。インターネットの利用は制限し、 GPS(全球位置システム)など、機能は必要最低限のものとするなど注意事項を決めたい」と 話す。

(朝日新聞、2005年12月8日 夕刊)

Body部に注目すると、犯罪の再発防止のための具体的取組みが紹介される度
に、その取り組みに対する住民の感想や意見などが引用表現（投射）によって
示されている。そこでは、導入部で述べられた概要の具体例としての出来事
（incident）が新情報として複数提示され、同時にそれに関わっている人々の解
釈（interpretation）が記録されていると言える。それらの出来事と解釈の順序
は決まっており、他の出来事や解釈と組み合わせを変えることはできない。語
彙連鎖においても導入部で使用された語彙がそのまま本文に繰り返し使われ
ることは少ない。文16以降ではこれまでの親やPTAの努力の結果として住民の側
に協力体制ができてきたという成果が表れ、住民の側に意識変化が生まれたこ
とが述べられている。さらに教育委員会の積極的な対応や警察の協力体制を示

すことで、不安に揺れるコミュニティーに安心と希望を与える効果をもたらしている。ここでは出来事1、2と出来事3、4の間にはある程度の時間的経過や因果関係が認められ、その意味では文16以降は記事全体の結論部に当たると考えることもできる。つまり、Text 3のステージ構造はText 1に比べてより構造化が感じられるのである。

Text 4

Headline	復興へ助っ人続々 台風23号被災地
Orientation	台風23号の影響で市街地全体が水に浸った兵庫県豊岡市や京都府舞鶴市では23日、引き続き行方不明者の捜索や、家屋や道路の復旧作業が再開された。被災後、初の週末を迎えた現地には、各地からボランティアが集まり始めた。
Incident 1	京都府舞鶴市付近では土砂崩れで道路が寸断され、7集落の約190世帯が一輪車による行き来ができなくなった。23日朝、市職員らが孤立している集落に、閉鎖されている道路を使って食料を届けた。
Incident 2	市中心部の大部分が浸水した兵庫県豊岡市、日本三景・天橋立のクロマツ200本がなぎ倒された京都府宮津市など、大きな被害を受けた地域に23日朝、ボランティアの第1陣が到着。被災者のもとに向かった。受け入れ側の各社会福祉協議会(社協)は、浸水で自らも拠点が機能マヒする中で作業に追われた。 豊岡市では登録を済ませたボランティアが4、5人でチームをつくり、泥がきなどの要請のある地域に散った。水が引いた後の市街地の道路脇には、水臭しになった家庭道具など大量の「災害ごみ」がうずたかく積まれている。ごみ処理は各自治体の役割の種だ。ごみ収集はこの日朝からようやく再開された。
Interpretation 1	市立豊岡北中1年の「崎智輝君(13)」は、1人で社協のボランティア受付を訪れた。自宅にはほとんど被害はなかったが、豊岡市消防署消防士の父は台風が襲った20日から家に帰らず、市職員の母も20日未明に帰宅するまで出ずっぱりだった。 「自分もほかの人を助けたい」
Incident 3	京都府宮津市でもボランティア約200人が作業にあたった。被害の少なかった市立栗田中学校の生徒62人も参加。家の間に約30センチ積もった土砂をスコップですくい上げ、バケツリレーで運び出した。
Interpretation 2	6年生の山田菜摘さん(13)は「近くでこんな被害があるなんて、大変だけど頑張ります」と話した。

(朝日新聞、2004年10月23日 夕刊)

天災を扱ったText 4においても、導入部の後に具体例としての出来事提示が続き、さらにその解釈といったステージ構造が見られる。しかし必ずしもすべての出来事の後に解釈が対応するとは限らず、またこのテキストには結論に相当する部分が特に見当たらない。

このような記事はある出来事によって被害をうけた人々が、様々な取り組み

を通して立ち直る姿を描いている。そこには、その具体的取組みとしての出来事とそれに対する解釈が含まれており、社会の一員としての取るべき行為や倫理的価値判断が表明されている。このことから、これら二つの報道記事は物語ジャンルのexemplum (Martin & Rose 2008; Rothery & Stenglin: 1997)、またはhuman interest storiesの中のmedia exemplum (Feez, Iedema & White 2008) に属すると考えられる。そしてそのステージ構造は次のようになる。

Orientation¹^Incident¹⁻ⁿ^Interpretation¹⁻ⁿ (Conclusion)

これを図式化すると、図5のようになる。本文部では導入部の具体例が次々に「付加‘and’される関係」になっていると言えよう。また図の点線に示されているように情報構造は全体的に平坦である。

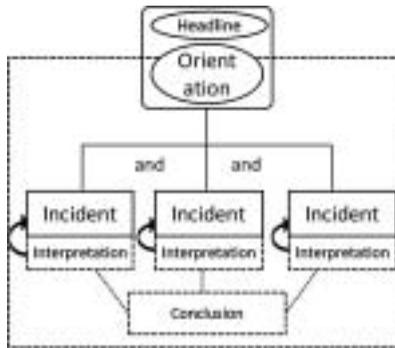


図5 Media exemplumの構造概念図

3-3 Media Exposition (社説) の構造

Commentaryの中のmedia expositionはある出来事に関して書き手の主張を展開するものと前述したが、その中でも代表的なものは社説であり、英語でleader、editorialなどと呼ばれている。日本の新聞の社説は新聞社の声として編集委員グループによって書かれる。そのため執筆者の個人名は記載されない。Text 5はText 1の事件発生の翌日に書かれた社説である。

Text 5では、まずheadlineの後に当該事件の概要が説明されている。これはmedia exemplumの時と同様、事件について読者に共通認識を持ってもらい、それを土台に議論を進めようとするためのものである。その意味で、この部分は記事全体の導入部（orientation）とすることができる。続いて文10から文14にかけて「日本は子どもにとって安全ではないのに、他国に比べ取り組みが遅れている（つまりやるべきことがまだ多い）」という筆者の主張（thesis）が示される。次にその主張を裏付けるための論証（argument）として、現状における問題点や具体的対策が提示される。最後に結論（conclusion）において主張を繰り返し、これまでの議論の正当性を強調している。特に文21以降の論証部では、「下校時」対策が様々な場合を想定して詳細に提案されており、論証の中で最も重要なものであることがわかる。更にこの部分を最後（つまり結論の直前）に配置することで、議論の展開をより強固で論理的なものにするという修辞上の工夫が見られる。以上のような主張—論証—結論のサンドイッチ構造は相手を説得する技術としてディベートやスピーチに多く利用されるものである。

Text 5

Headline	1 また少女被害 大人が懸命に守らねば
Orientation 1	2 またしても9歳の少女がむごい姿で見えられた。
	3 広島市の小学1年生の女児に於いて、栃木県で行方不明になっていた女児が茨城県の山林で遺体で見つかった。
	4 遺体には跡がどを刻まれた跡がいくつかあった。
	5 抵抗するすべもない女の子を傷つける犯人の姿が浮かび、その残酷さに憤りを抑えられぬ。
	6 今回の犠牲者も小学1年生だった。
	7 友だちと別れて、ひとりて下校するところを何者かに狙われたらしい。
	8 被害者の無防備な姿が広島的事件と重なり合う。
	9 少女の通学路は2キロもあり、ひとけのない道程が多い。
	10 鈴木林や田畑を縫って一人で自宅を目指す少女は、結本やアミノなどとみかく、現実の社会で自分がたれかに襲われることなどまた想像すらできなかつただろう。
Thesis	11 小学生を狙った犯罪は近年絶えることがない。
	12 「安全に気をつけて」「知らない人にはついていかないで」。
	13 そんな通り一遍の注意ではもう子どもを守ることができな社会になってしまったのかも知れない。
	14 広島では容疑者はたまたまペルー人だったが、子どもを狙う犯罪には国籍の差などなく、都会と地方との差もない。
	15 それなのに、諸外国の取り組みに比べると、日本はこれまで子どもを狙う事件を軽く扱いすぎてきたらしいゆえだ。
Argument	16 子どもに対する犯罪は常習化する。
	17 刑務所などの矯正施設では、治療プログラムを早急に充実させてほしい。
	18 子どもを狙う犯罪者には、性的な動機が少なくない。
	19 改正された刑法で強姦罪（せつ）の法定刑は7年から10年に引きあげられたが、それで十分かどうか検討する必要があるだろう。
	20 地域社会が対応を出し合って子どもを守ることも大切だ。
	21 子どもに声をかけてゆくような不審者がいたら、その情報を地域で共有する仕組みを広めたい。
	22 特に練心の注意を払ってほしいがなのは下校時である。
	23 今回の女児は防犯ブザーを持っていたが、被害を防ぐことができなかった。
	24 通学路が遠く、大人目の届かない場合には、幼稚園や保育園で使われているような送迎バスを用意するなどの対策を取るべきだ。
	25 保護者の視線ではなく、犯人の視線に立って、子どもたちの通学路を再点検する。
	26 そのうえで、危なそうな通学路の箇所要所に大人が立つ。
	27 そうした工夫が欠かせない。
	28 人手が足りないなら、在校生の父親だけでなく、ボランティアを広く募りたい。
	29 通学路にある企業や商店にも協力を呼びかけたい。
Conclusion	30 これまで日本は世界でも最も安全な社会として、外国から驚嘆のまなざしを向けられてきた。
	31 しかし、そんな時代は過ぎ去った。
	32 残念ながら、認識をもう改めるほかはない。
	33 子どもを守るためには、あらゆる手段を講じるべきではない。

朝日新聞、2005年12月3日（朝刊）

Text 6

Headline	台風ファッシュ 地球が怒っているのか
Orientation	台風23号のすさまじい暴と雨で、たくさんの方が亡くなったり、行方不明になったりした。ことし、1日本に上陸した台風はこれで10個になる。過去30年間の年平均は2.8個だから、いつもの4倍強、頻度の半端である。 しかも、ことしは強い台風が多い。最大風速が時速33メートル以上になるものを「強台風」と呼ぶが、「強い」や「非常に強い」がほとんどだった。 例年は10月になると、台風の上陸はほとんどなくなり、月平均で0.1個だ。ことしは10月にも2個目である。南の海には次の24号が入る。毎週のように台風がやって来るかもしれない。 台風は南の海の水が温かいほど強くなり大きくなる。つまり、この夏は40億リットル量が増えた。
Thesis	異常な気象は日本だけではない。 この夏、米国のフロリダ州はハリケーンに4度襲われた。米本土で20人以上が死亡した。カリブ海のハイチはこれらのハリケーンで2700人以上が犠牲になり、政権不安の一因になった。 雨が少ないうことで知られた北京で、02年ごろから、夏に梅雨のような雨が降るようになった。現地の新聞や雑誌が「12日間太陽が見られぬ」、南方の梅雨の感じがわかった」（02年）、「北京は昔のうから歴史上はじめて梅雨に入った」、(03年)、「6月末、北京は梅雨に入った」（04年）と書くようになった。 欧州がひどい暑さに見舞われたのは昨年だった。8月の最高気温が平年で2.4度のパリ・オルリ空港で40度になり、フランスで熱波による死者は約1万5千人に達した。 それぞれ、真夏の気圧の配置や大気の動きなどが直接の原因になっている。だが、その背後で地球温暖化が影響しているのではないかと、そう多くの人々が感じている。
Argument	石炭や石油を燃やして出る二酸化炭素の急激な増加とともに、地球の気温はこの100年間で0.7度上がった。 国立環境研究所などの試算によれば、このまま手を打たなければ、これから100年で4度上がる。そして日本では真夏日がふえる、豪雨もふえる。 温暖化は気温が高くなるだけではない。大気を持つエネルギーがふえるので、気候の変わり具合がもっと激しくなる。雨は1日あたりの量がふえる、気温の高いところはさらに高くなる。逆に雨の少ないところは砂漠化がいっそう進むとみられている。
Conclusion	米国の研究者も、温暖化でハリケーンの風力や雨量が増えるかと発表した。 温暖化はゆっくりと進む。毎年の気温や雨量にも変動の幅がある。このため、1年だけの変化では、その原因がどこにあるのかははっきりしない。 だが、いま世界が経験していることはまさに温暖化の予測の通りではないか。そんな気がする。 台風などの災害に備えながら、地球の気候変動を早く手でも考えたい。

Text 6 においてもText 5と同様の構造が見られる。Text 6 では日本を襲った台風23号と最近の日本の異常な気象状況が導入部で説明され、さらに「それらの異常気象は実は世界的なものであり、地球温暖化によるものだ」と主張する。その主張の裏付けとして、科学的な具体的数字や、「国立環境研究所」や「米国の研究所」などの権威のある情報源を論証部に示しつつ、読者を説得している。最後に結論部において、まず、予想される反対意見を「先取り」する形で「原因ははっきりしないが」と譲歩し、その上で再度主張を繰り返し全体の議論をまとめ上げている。以上のことから社説のジャンルの構造は次のようになり、他のジャンルより明確なステージ展開が見られる。

Orientation^Thesis^Argument¹⁻ⁿ^Conclusion

この関係を図式化すると図6のようになると考えられる。そこでは主張と論証の関係は「説明‘because’の関係」であると言える。情報構造は、結論部に向かって情報が徐々に蓄積され、最後に情報のうねりが最高潮に達する正三角形（点線部）の形を成していると言える。



図6 社説の構造概念図

4 主題構造

次に3つのテキスト間の主題構造を比較したい。Halliday (1994) は、メッセージは主題 (theme) と題述 (rheme) との組み合わせからなり、主題はメッセージが何について述べているかを示す起点であり、題述はその主題を展開するものであるとしている。さらに主題構成はテキスト形成的 (textual)、対人的 (interpersonal)、経験構成的 (experiential) なものから成り立つとしている。それぞれの一般的な具現方法は、テキスト形成的主題は接続詞や接続付加詞が、対人的主題は呼称やモーダル付加詞が、そして経験構成的主題は、参与要素や状況要素が対応する。日本語の場合、主題は基本的に助詞の「は」によってマークされる。以下にそれぞれのテキストの主題構造を示しながら分析する。

4-1 Hard Newsの主題構造

まずText 1の主題構造であるが、テキスト形成的主題と対人的主題は存在しない。経験構成的主題の中で中心を占めているのは被害者に関するもので、テキストのほぼすべてに及び、主題または主題の一部として存在する。また、捜査本部に関する主題「捜査本部は」(5, 12)、「調べでは」(6, 10)が現れるが、これはhard newsが警察からの報告を基に作成されていることを示すものであり、情報源に関して記事の客観性を保つ働きをしている。文16以降は事件発生に関係する時間的、空間的状況要素が主題化され、事件の背景が題述部で解説されている。このように経験構成的主題はそのほとんどが図2で示したbody部の主要語彙要素と重複する。つまりそれらはlead部に現れている語彙要素ということの意味し、やはり主題構造の上でもlead部が中心的な力を持つことがわかる。また物語文において、一度題述部に示された「新情報」は「旧情報」として次の節の主題になることが多いが、表1に示したように、ここでは同じ新情報がその後の題述部に繰り返し現れるという特徴が見られる。

表1 Text 1 (hard news) の主題構造

Theme/Given				Theme	
Textual	Inferential	Circumstantial	Topical	Topic/New	Theme
1				福中道、さん100円の方がおらなくなってしまった意味で、200円は2倍です。意味が	女編組定数大宮市の山形内で見つかった。
2		遺体には、		舞など数か所に舞、舞が	あり。
3			福中、次地町民管は	これが	致命傷、と見られる。
4				証拠は	遺体・見体遺棄現場の同定遺体本部包
5			捜査本部は		遺体を確認した。
6		調べでは、	赤井は		200人未満だと見られる。
7				目撃者福中、舞は出入り	深捜大宮市の山形内で見つかった。
<hr/>					
12			捜査本部は	サンパセルなどの 所有品を 同乗者が	見当たらないという。 足元を踏ました様。 車で運ば、 山形内に遺棄したと見ている。
13			女性は		遺体等の発見は人としていない。
14			(女性は)		一歩して遺体を確認してから 行方わからなくなった。
15				仕事から帰宅して、母親が	発見されたという。見つか
19		大宮市によると、 捜査本部は	在英証 1年証は		警視、神の上野台と下町するが、 400名程度で、 上野台の発見と見られている。

4-2 Media Exemplumの主題構造

Text 3の主題構成においては、テキスト形成的主题が1例見られるものの对人的主题は見当たらず、Text 1のものと似ている。主题の中心的位置を占めるのは文4で提示された「大人たちは」であり、事件に対する彼らの取り組みや発言内容が新情報としてその後の題述部に提示されて行く。しかしこの「大人たち」は、その後の主题では「4年生の母親(4)」「PTA役員は(12)」「PTA会長は(15)」「保護者は(15)」「住民は(16)」「自治会会長は(18)」など、様々な人々として姿を変える。そしてそれぞれの主题のスパンは短い。またhard newsのような情報源を示す「～によると」という状況要素の主题はない。このことはこの記事が記者自身による調査報道であることを意味し、導入部の最後(4)には記者2名の署名がされている。これは一般に「バイ・ライン」(by-line)と呼ばれ、欧米ではあたりまえであるが、日本も最近記事に署名する傾向がでてきた(原1997: 163)ことの証しでもあろう。このような署名は警察からの公式報道を基礎とした日本のhard newsではあまり見られない。

表2はmedia exemplum (Text 3)の主题構造の一部を示したものである。前半は、Text 1と同じように題述部の新情報がその後の題述部に繰り返される構造が見られる。しかし後半部では新情報が次の節の主题になる「New→Theme」のパターンも見られる。

表2 Media exemplum (Text 3) の主題構造

Text Reference (line)	Thematic/Given	Topical	Topic/New	Message
1	電子版で、が読んだ、で印刷では		この「東京110」の歴史が、 探偵小説である。報道記者が 執筆している。読んだ記事	「110」の歴史を扱った 記事
2	日本では	子どもたちは		「110」の歴史を扱った 記事
3	東京	犯人たちは		「110」の歴史を扱った 記事
4				「110」の歴史を扱った 記事
5				「110」の歴史を扱った 記事
6				「110」の歴史を扱った 記事
7		子どもたちは		「110」の歴史を扱った 記事
8				「110」の歴史を扱った 記事
9				「110」の歴史を扱った 記事
10		4年間の東京110の歴史は	賢い犯罪者が その犯人は	「110」の歴史を扱った 記事
11				「110」の歴史を扱った 記事
12		超絶的な盗難犯は 東京110には 難関な課題は		「110」の歴史を扱った 記事
13				「110」の歴史を扱った 記事
14		盗難犯の「盗難犯」は	犯人たちは	「110」の歴史を扱った 記事
15		盗難犯の「盗難犯」は 「盗難犯」の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事
16		盗難犯の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事
17		盗難犯の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事
18		盗難犯の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事
19		盗難犯の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事
20		盗難犯の「盗難犯」は		「110」の歴史を扱った 記事

4-3 Media exposition (社説) の主題構造

Text 5 (社説) で使われている話題的主题 (topical) は、「子どもを狙った犯罪は」「強制わいせつの法定刑は」「日本は」「そんな時代は」など、他の2つのテキストと比べてより抽象的で、種類も様々である。主題展開においては、題述に現れた新情報が後の文の主題に用いられる「New→Theme」のパターンが多く見られ、新情報を基に新たな論理的説明を加える形態になっている (表3参照)。

表3 社説（Text 5）の主題構造

	Textual	Interpersonal	Theme/Given	Topical	Topic/New	Rheme
8				少女の通学道は		と申すも、
9				途中から同様に一人で	とけのない風情が	と云
10				で歩かせるのは、		「現実に社会が子供たちに課している負担を減らす必要はないか」と
11				小学生も通った経験は	と云	「被害に巻き込まれて
12						死んでしまえば、
13				児童会では		子どもを学校に引きこめず、社会になっ
14				子どもを呼び戻すには		て、
15				児童会では		「一人一人の力が
16				子どもを呼び戻すには		なく、
17						社会と地元の協力
18						なく、
19						「被害に巻き込まれては、と
20						子どもを巻き戻すには、引きこめて
21						置くことも、
22						「被害に巻き込まれては、と
23						子どもを巻き戻すには、引きこめて
24						置くことも、
25						「被害に巻き込まれては、と
26						子どもを巻き戻すには、引きこめて
27						置くことも、
28						「被害に巻き込まれては、と
29						子どもを巻き戻すには、引きこめて
30						置くことも、
31						「被害に巻き込まれては、と
32						子どもを巻き戻すには、引きこめて
33						置くことも、

さらに結論部31において対人的主題である「残念ながら」が使われている。Eggs (1993: 319) が「対人的主題が多いほどより権威主義的色彩の少ないテキストになる」と指摘しているように、ここには読者との対人的関係に配慮しながら議論を進めようとする筆者の態度が現れている。このように筆者の価値判断を含むモーダル付加詞を文頭に置くことにより、筆者の主張を一方的に述べているという印象は和らぎ、読者との意識の共有が生まれる。このような対人的主題は他の2つのジャンルには見られない。

また社説の主題における特徴のもうひとつに、他のテキストに比べ接続詞や接続付加詞によるテキスト形成的主题が多く見られる点が挙げられ、文頭の「またしても」を含め合計5つ見ることができる(図7参照)²。接続詞は、構造面において前後する2要素がどのようなつながりの関係にあるのかを言語化したものであり、文脈展開機能を発揮するだけでなく、文章・談話の全体的構

² 例文の下線部は接続語句を示し、左側の矢印はその語句が網羅する意味的範囲を示す。

造のしくみを作り上げる機能を持っている（野田・益岡・佐久間・田窪 2002: 189）。また接続表現によって示される意味は、大きく分けて、時間的継起や因果関係などの外界レベルにおける関連性を再現するテキスト外的（観念構成的）なもの、話し手がそれを自らの立場から捉え直し、その論理の意味を修辭的に示すテキスト内的（対人的）なものがある（池上 1983; Halliday 1994; Martin 1992; Martin & Rose 2007）。この考えによると、文1の「またしても」は事実の連続を意味するのでテキスト外的であるが、図7に示した残りの4つはテキスト内的な接続表現であり、前後するテキストの意味関係において、筆者が考えるに及んだ主張を展開するために用いられていると言える。

例えば文14では「それなのに」により、前の二つの段落に示された日本の現状や問題点に対して、当然取られるべき対策が取られてこなかったことへの意外性が示され、文21の「特に」は地域で知恵を出し合う重要性が指摘された後、その中でも考えられる最も重要なものを例示するために使われている。文25では「そのうえで」によって、直前に主張された対策を実施し、それを実行した後、次に次の対策を講じるべきだという主張を導き、結論部の文29においては「しかし」によって、日本に対する過去の肯定的評価とは反対の否定的現状を提示することで対比的効果を生み、問題の重大性を強調している。このようなテキスト内的接続詞を中心とした主題構造は、文と文、あるいは段落と段落の意味を論理的に関係づけ、テキスト全体の結束性を強めていると言える。

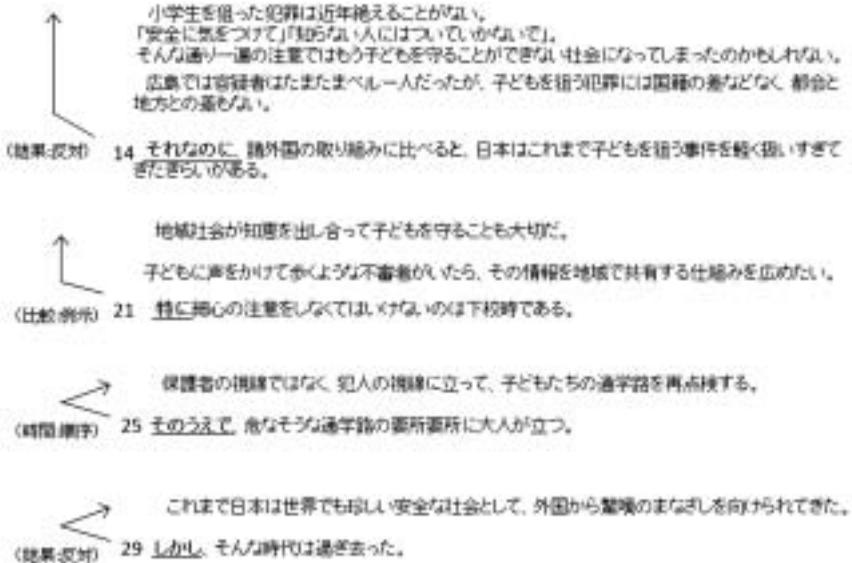


図7 社説 (Text 5) における接続表現

5 Appraisal分析

5-1 Appraisalとは

Appraisalは評価に関するものであり、我々が物事や人物に対してどう感じたかを述べることにより、聞き手や読み手との対人的関係を遂行するための言語資源である (Martin & Rose 2007: 25-26)。つまりAppraisalが多く見られる文章は書き手の感情などの主観が多く含まれたテキストであると言える。Appraisalは大きくengagement (関与)、attitude (価値判断)、graduation (程度) の3つの領域から成り、それぞれがテキスト内で同時に選択されながら評価が行われる (図8 参照)。まずattitudeはAppraisal理論の中心を占めるもので、感情の表出を表すaffect、人物の性格や行動を評価するjudgement、物事の価値を評価するappreciationに分けられ、それぞれ肯定・否定の評価がなされる。Attitudeは一

般に形容詞などの語彙部門において明示的 (inscribed) に表現されるが、表面上中立表現をとりながら価値判断が暗示 (evoked) されるものもある。

Engagementは、話し手(書き手を含む)がどの程度テキストに関与しているかを表すもので、そのテキストにおける価値判断が話者単独のものなのか(monogloss)、あるいは話者以外の価値判断も取り入れる余地を残すものなのか(heterogloss)により二分される。更に、heteroglossは、投射、モダリティ、譲歩などの文法的資源によって具現される。Graduationは評価を行う際の表現の程度に関するもので、表現が強調されたものか弱められたものかに関するforce(強度)と、表現の際立ちが鮮明なものか曖昧なものかに関するfocus(焦点)に分かれ、それぞれ程度の高低に関して段階がある。

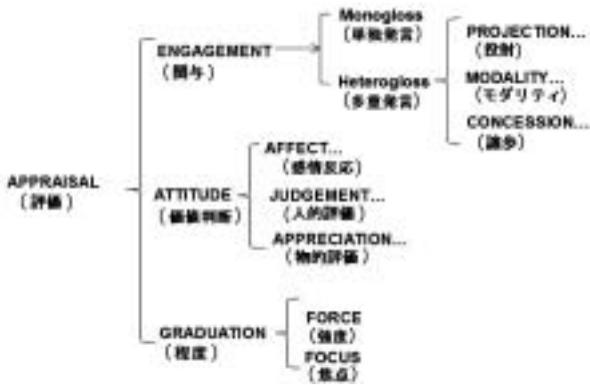


図8 Appraisalシステムの概念図 (Martin & White: 2005を元に作成)

5-2 Appraisal分析

表4はAppraisal理論に従って、それぞれのテキストを分析したものである。Hard newsにおいては、評価は主にgraduationとengagementには見られるものの、attitudeにおいてはほとんど見られず、暗示によるものが1例あるのみである。Engagementに関しては、記事の情報源を捜査本部に求めるものが中心である。

6 まとめ

以上のようなステージ構造、主題構造、Appraisalの分析を通して、3種類のテキスト間に構造的、対人的意味の面で多くの違いがあることがわかった。Hard newsのステージ構造は、nucleusを中心にbody部が比較的自由的な位置関係で詳細を記述する。情報は重要なものからそうでないものへと流れ、全体の情報構造は逆三角形のパターンを示す。Body部の自由的な構造にも関わらず、テキストの連続性が保たれているのは、語彙的結束性の強さによるところが大きいと考えられる。Body部のそれぞれの意味機能はlead部の「明確化」を行っており、それはelaboration（敷衍）の関係にある。また、主題展開に関してはlead部に提示された主要語彙要素を主題にとりあげ、テキスト全体を通して維持される傾向にある。その意味で、hard newsのleadは記事全体のhyper theme（Martin：1992）に相当するものである。題述部においては同じ新情報が繰り返し現れることがある。またテキスト形成的、対人的主題は見られない。このように前後の文脈に依存しない構造は、客観的な報道記事の特徴とも言える。

Media exemplumは、導入部で示された内容を本文で具体化しながら展開する構造である。本文においては、新たな出来事やそれに対する解釈が次々と「付加」されるextension（拡張）を中心とした構造を形成している。情報の流れとしては、重要なものとそうでないものの違いは明確ではなく、全体的にフラットな情報構造を呈している。主題展開においては題述部で新情報が何度か繰り返されるなどhard newsに近い構造を有するが、同時に「New→Theme」の主題パターンも見受けられる。対人的主題は見当たらず、テキスト形成的主題は若干使用される。

Media expositionの構造は、テキストが進むに連れ議論が次第に深まり、結論部において情報の波が最大になる正三角形の情報パターンを有する。主張に対して論証（argument）はその「要因」に相当し、両者はenhancement（増強）

の関係にあると言える。主題構造は、「New→Theme」の主題パターンが他のジャンルに比べ多く見られると同時に、接続詞の使用などのテキスト形成的主题も豊富で、それらはテキスト全体の論理的展開に大きく寄与している。また対人的主題の使用も確認でき、書き手の主観を表現することで読者との対話を進める姿勢が見受けられる。

Hard newsのAppraisalにおいては価値判断（attitude）の使用はほとんど見られず、書き手の主観は表面的には感じられない。また書き手の主観を表すモダリティーの使用も避けられている。つまり、当該テキストは外的世界に関する事実が客観的に記述されたものであると言える。ただし、暗示的価値判断の使用や強調的表現なども若干見られ、ここに書き手のイデオロギーが入り込む余地が残ると言えよう。Media exemplumにおいては限定的ではあるが書き手の価値判断が数例見受けられ、また第三者の声としてモダリティ表現を使うことで間接的ではあるがテキストにメッセージ性が感じられる。Media expositionの価値判断は豊富で、モダリティ表現も多い。また多くのモダリティはobligation（義務）に関するものであり、社会変革に向けた行為を読者に求めるメッセージ性を持っている。

以上のように報道記事における客観性は、可能な限り対人的・テキスト構成的意味を排除し、観念構成的意味を中心とした情報構造により獲得されると言えよう。しかしBell（1991: 146）が「ジャーナリストは記事を書くのではなく物語を書くのだ」と指摘しているように、記者はただ事実のみを記述しているのではなく、例えば暗示的な価値判断の使用や表現方法の強調、あるいは第三者の意見の引用や情報の繰り返しなどにより、巧みに読者を引き付ける読み物を作り上げているのである。それらは書き手の主観的判断によるものであり、そのことはつまり報道において全くの客観的記事というものはありません。そして時間と共に情報価値は薄れ、その分記者の主観が入り込む余地も更に増えてくる。このようにしてmedia exemplumでは記者

の主観を示す価値判断やモダリティが導入され易くなり、結果的にhard newsとmedia expositionの中間的な言語的特性を有しているのだと言える。

メディアにおけるテキストはそれぞれの社会的目的を達成するために、それに一番ふさわしい言語形態を選択しながら機能する。その言語的特性を今後更に解明していくことは、報道記事や論説文を書く際に有用となるだけでなく、メディア・リテラシーの観点から、報道メディアの裏に隠された意味を批判的に読み解く上で重要であると考えられる。

References

- Bell, A. (1991) *The Language of News Media*. London: Blackwell.
- Eggs, S. (1993) *An introduction to Systemic Functional Grammar*. London: Continuum Intle Pub Group.
- Feez, S., R. Iedema & P.R.R. White (2008) *Media Literacy*. NSW Department of Education and Training; NSW AMES.
- Halliday, M.A.K. (1994) *An Introduction to Functional Grammar*. (Second Edition) London: Edward Arnold.
- Iedema, R., S. Feez & P.R.R. White (1994) *Media Literacy*. Sydney, Disadvantaged Schools Program. NSW Department of School Education.
- Iedema, Rick (1997) The Structure of the Accident News Story. *Australian Review of Applied Linguistics*. 20-2. 95-119.
- Labov, William (1972) The transformation of experience in narrative syntax. In: William Labov, *Language in the Inner City*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 354-96.
- Martin, J. R. & D. Rose (2003) *Working with Discourse: Meaning Beyond the Clause*. 1st edition. London: Continuum.
- Martin, J. R. & D. Rose (2007) *Working with Discourse: Meaning Beyond the Clause*. 2nd edition. London. Continuum.
- Martin, J. R. & D. Rose (2008) *Genre Relations - Mapping Culture*. London: Equinox.
- Martin, J. R. & P. R. R. White (2005) *The Language of Evaluation - Appraisal in English*. New

York: Palgrave Macmillan.

Martin, J.R. (1992) *English Text*. Philadelphia: John Benjamins.

Rothery, J. and M. Stenglin (1997) Entertaining and instructing: exploring experience through story. In: Frances Christie & J.R. Martin (eds.) *Genre and Institutions*. London: Continuum.

White, Peter (1997) Death, disruption and the moral order: the narrative impulse in mass-media 'hard news' reporting. *Genre and institutions: Social processes in the workplace and school*. Christie, F and Martin, J.R. (eds.) London: Cassell. 101-133.

池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所。「事件と取材と報道」編集委員会 (2005) 『事件と取材と報道』朝日新聞社.

殿岡昭郎 (1979) 『現代新聞紙学』玉川大学出版部.

野田尚史・益岡隆志・佐久間まゆみ・田窪行則 (2002) 『日本語の文法 4 - 複文と談話』岩波書店.

原 寿雄 (1997) 『ジャーナリズムの思想』岩波新書.

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティー』(日本語の文法 3) 岩波書店.